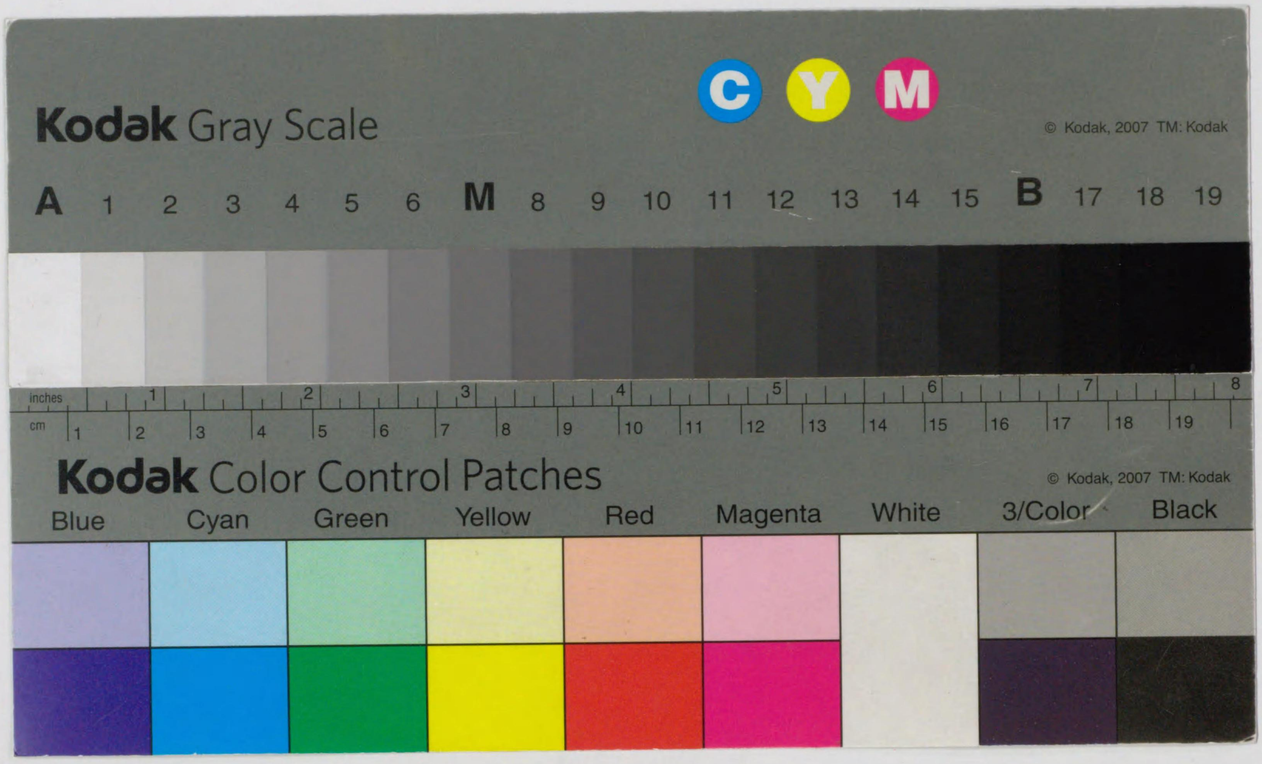
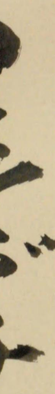


614 89
614-89
12005015355557

限定私家版八百部



帝國圖書館藏

鳥居清長

野口米次郎著

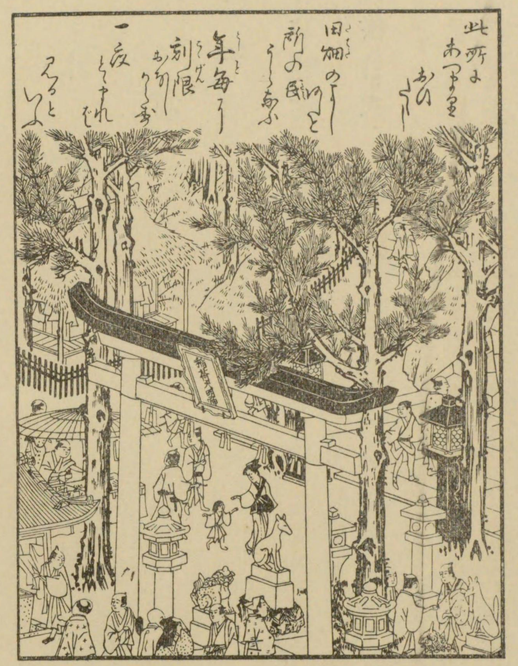
昭和六・六・一 帝國圖書館

清長

目次

凡例……五
清長論……九
挿繪解說……四七
挿繪目次……一三七

614-89



凡例

本集の原色版は製作年代の順を追つて配列されたのでない。

最後のテキスト中に第八十九圖に至る三枚續を置いたのは、折込み製本の都合であるが、それ等は作柄からいつて兎に角清長の力作菅絃薬と云はねばならない。私は原色版の次に二枚物六圖を置いが、これも製作年代に依つたのでなく配列の都合からである。第十五圖から製作年代の順に依つて配列されてゐる、即ち中判『箱根七湯名所』を以て始まつてゐる。

私は清長の芝居繪を仕舞の方に置いた。本來からいふと本集の圖は第六十四圖の『那須の與市』から始まるべきであるが、私はそれを細判芝居紅繪の前に置いた。私はまた清長の肉筆物一點を加へて彼の全部を知るに遺憾なからしめた積りである。

今本集に入れてある九十點の作品をずらりと眺めて、私は再び清長が如何に偉大な畫家であつたの感を繰返へさざるを得ない。錦繪版畫の創始者として春信の地位は永劫に不變である。然し今日から見ると、清長の藝術的存在は優に師宣のそれに匹敵し得るものとさへ考へられる。單に彼は鳥居派を

沈滯の底より救ひ再び昔の清信時代に於けるやうな全盛に立たせただけのものでない。また清長の本領は鳥居派の役者繪になく所謂美人を中心とした世相圖であつて、色と構圖の範を示して同時代の浮世繪畫家すべてをしてそれを模倣させるに至つた功蹟を考へ及んだならば、もとより誰も彼が名乘るに至つた鳥居の名前に掣肘されて議論しないであらう。彼は版畫の調色を春信の琺瑯細工式から救つた。勿論彼は彩色の夢想家であつたが、その藝術的卓越性は描線と描線との間に純正優雅な色を最も現實的に働かせてゐる。そして彼は師宣のそれにも匹敵し得る印象的描線を調色のために傷つけてゐない。彼の描線は畫面全體に渡つて靈動してゐる。彼の作品を眺めて味ふといふことは實に大きな藝術教育である。私は清長と國を同じうして生れたことに感謝せざるを得ない。

私は本集を作るに當つて私を援助された三原繁吉、淺野長武、三浦直介、高橋誠一郎、清水源泉堂の諸君に敬意を拂ひ、遙か英米に於ける舊友フキッケ、グーキン、ビニョン、ストレーンジ諸君に感謝の挨拶を送る。

昭和六年五月上旬

野口米次郎

隅田堤下の花見美人

第一圖

美南見十二候の内座敷よりみを眺めて

第二圖

第三圖　雪の朝

第三圖　　雪の朝

第四圖　當世遊里美人合の內お座敷の裝ひ

第四圖　當世遊里美人合の内お座敷の裝ひ

第五圖　「藤花の下を急ぐ女」の一部

第五圖　「藤花の下を急ぐ女」の一部

第六圖　風俗十二通意の内茶屋を出る男女

第六圖　風俗十二通意の内茶屋を出る男女

第七圖　　和國美人略集の一

第七圖　和國美人略集の一

第八圖　熊に乘る金太郎

熊に乗る金太郎

第八圖

浴場内の景

第九圖

涼夕の岸河町濱

第十圖

六　鄉　川　渡　船

第十一圖

夕の町色内の候二十見南美

第十二圖

美南見十二候の内二階の欄干に寄つて

第十三圖

龜井戸詣

第十四圖

第十五圖

箱根七湯名所の内宮の下

第十六圖　箱根七湯名所の内きが

箱根七湯名所の内ゆもと

第十七圖

箱根七湯名所の内とうの澤

第十八圖

第十九圖　淺草金龍山十境の内橋上の三婦人

第二十圖　淺草金龍山十境の内茶見世

第二十一圖　江都夏十景の内高田

第二十二圖　　淺草金龍山八境の內お宮詣

第二十三圖　廻廊に立つ三美人

第二十四圖

女今川の内美人上陸

第二十五圖　誹風柳多留の一

第二十六圖　美南見十二候の内五月

第二十七圖　色競艶婦姿の内結髪

第二十八圖　雛形若菜の初模様の一

第二十九圖　吉原藝者の手古舞姿

第三十圖

當世遊里美人合の内道を急ぐ藝者

美通多内の合人美里遊世當

第三十一圖

第三十二圖　當世遊里美人合の內蚊帳の內外

第三十三圖　風流東之錦の内浴後の美人

第三十四圖　風流東之錦の内浴後の三美人

風流東之錦の内風吹く日の外出

第三十五圖

第三十六圖　風流東之錦の内潮くみ

第三十七圖

風流東之錦の内盆栽賣り

風流東之錦の内坐睡

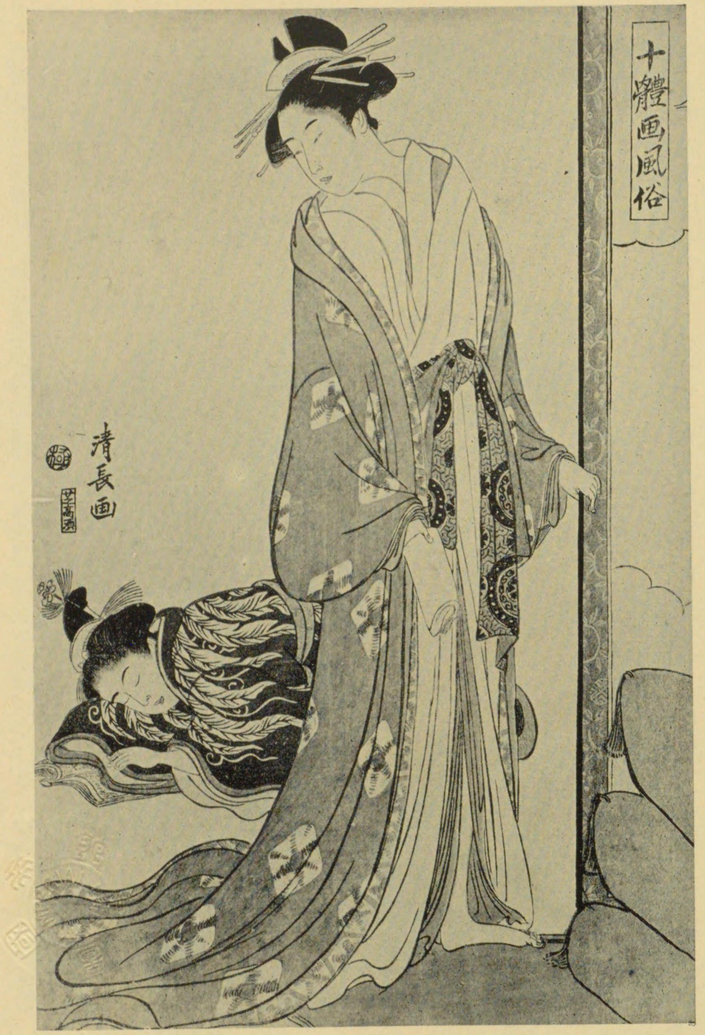
第三十八圖

第三十九圖　風流東之錦の内お宮詣

風流東之錦の内萩の庭

第四十圖

第四十一圖　　美南見十二候の内漁火の月



十體畫風俗の内床入りの遊女

第四十二圖

第四十三圖

十體畫風俗の内夏の椽臺

第四十四圖　　山下金作と二美人

第四十五圖　　市川門之助と遊女

好里村中

第四十六圖

第四十七圖　牡丹園

第四十八圖　洗濯

第四十九圖

金魚賣り

第五十圖

子寶五節遊の一

第五十一圖　金時

第五十二圖　「色道十二番」の一部

「色道十二番」の一部

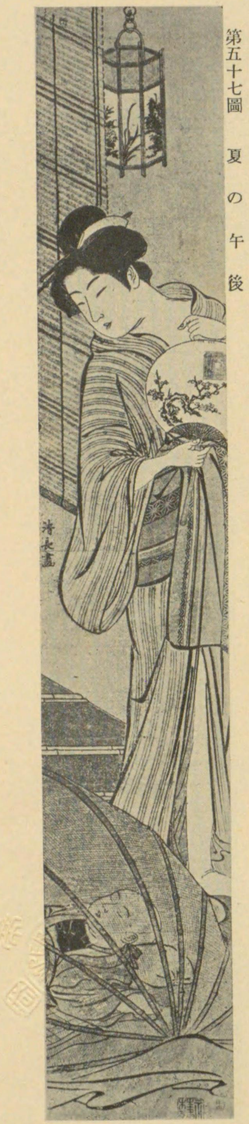
第五十三圖

第五十四圖　「燗れた女」の一部

第五十五圖　藤花の下を急ぐ女

第五十六圖　藝者と箱屋

第五十七圖　夏の午後



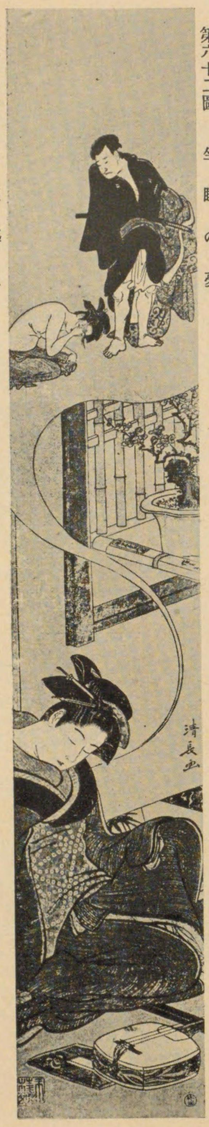
第五十八圖　日傘の藝者

第五十九圖　平六藝者

第六十圖　おこそ頭巾の女

第六十一圖　石段を下る女

第六十二圖　坐睡の夢



第六十三圖　大道藝人

第六十五圖　市川門之助

第六十四圖　那須の與市

第六十六圖　半四郎と金作

第六十七圖　半四郎の月さよ

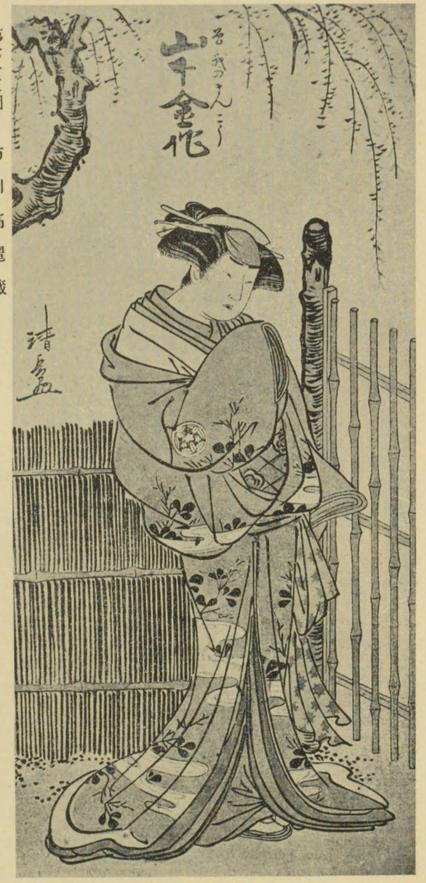
第六十八圖　人形つかひ

第六十九圖　人形つかひ

第七十圖　白猿顏見世のつらね

第七十一圖　山下金作のあこや

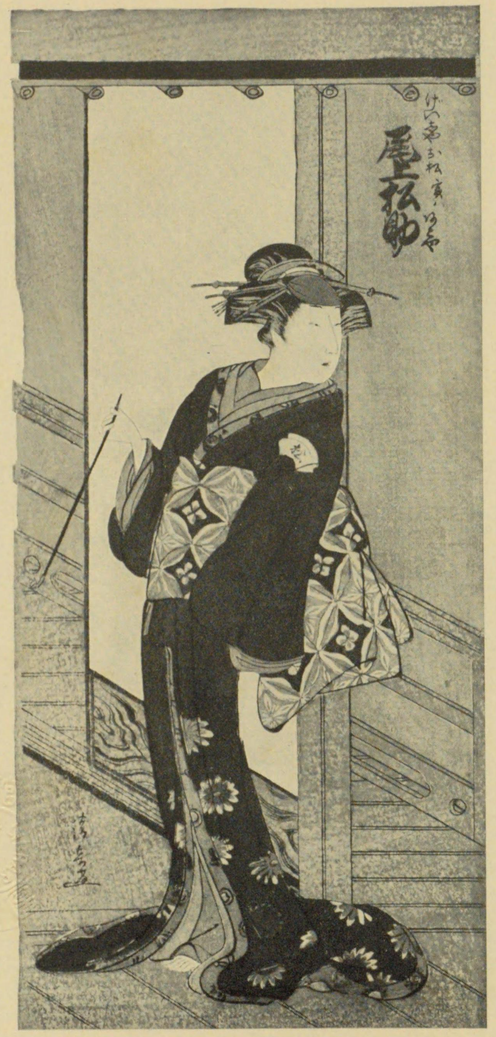
第七十三圖　市川高麗藏



第七十二圖　山下金作の滿江御前

瀬川菊之丞の石橋

第七十四圖



第七十五圖　　藝者お松實はあこや

第七十六圖

太平記白石噺の一

第七十七圖

藏麗高川市と好里村中　り語出

第七十八圖　出語り　門之助菊之丞半四郎

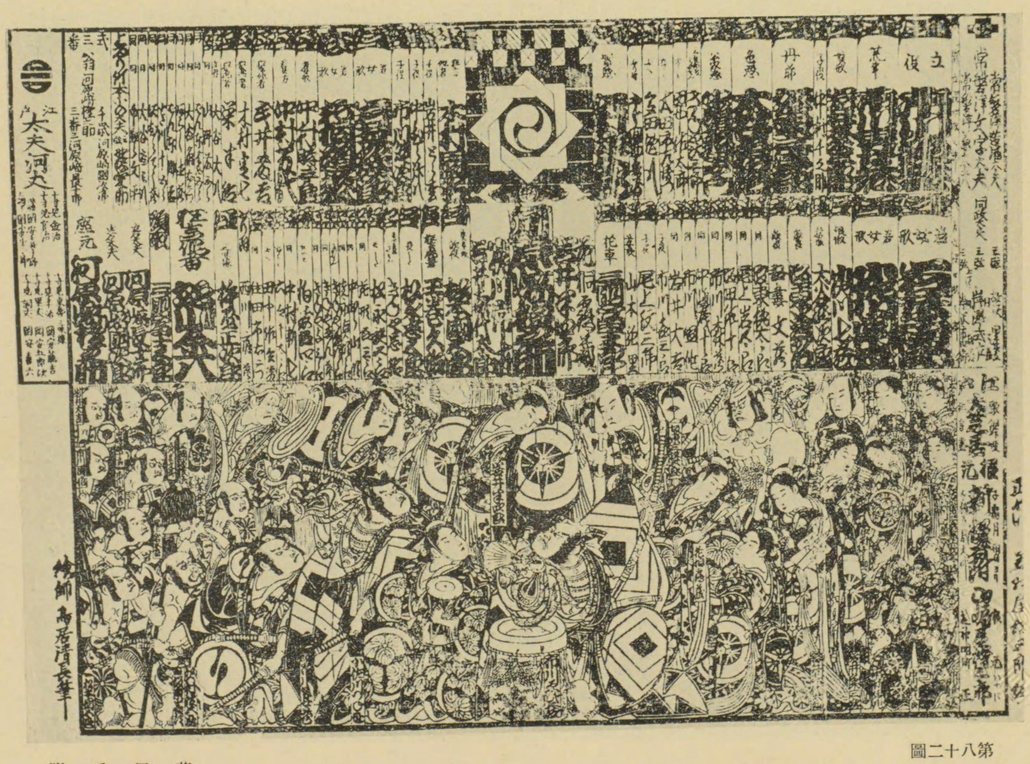
第七十九圖　正行と辨内侍

五代目團十郎の暫

圖十八第

第八十一圖

顏見世寄初の光景



第八十二圖

附番居芝

第八十三圖　　五根の矢一郎

清長は浮世繪版畫の最高峰に立つ

清長論

師宣が風俗版畫で地上生活の醜美諸相を盛り始めたのを萬治元年（千六百五十八年）の『鴨長明抄』とすると、それ以後寛保元年に至る八十三年間は鳥居清長の出現に對する當然に有らねばならない準備期であつた。彼は浮世繪版畫の最高峰に立ち、恰も富士山頂の巨人が周圍を見下する如く、歌麿その他の諸連峰に價値ある影響を與へて師の排禮を拂はせた。若し假に清長が現はれなかつたならば、所謂寛政の黄金時代は恐らく二三十年は後れたであらう。今日一般的に歌麿寫樂之豐國の寛政期を浮世繪の黄金時代といつてゐるが、それは爛熳たる花盛りは五月の若葉と相接してゐるといふ意味に於て是認すべきもので、嚴正の意味からいふと、清長以後の諸家は富士下山須走の頽廢期に屬してゐる。私は今清長の出現に八十三年間を要したといつたが、如何なる藝術にしてもその完成に必要とする年月としては、八十三年間は決して長いとは思はれない。富士登山にしても森林帶の裾野からよち〳〵歩を進めねばならない、然し私共は登山の絶頂を極めた時直に下山の準備に取りかからなければ

ならないことを悲しむ……清長の全盛期を天明三年よりとすると、わが今日世界に誇る浮世繪版畫藝術も僅か五年にして早や悲しき頽廢期に入らねばならなかつたのである。仲秋の月が暫時の間にのみその美容を輝かし、春の櫻花もその眞盛りは一日に過ぎない。浮世繪藝術も自然の法則に順應した一現象であつて、私共はその完成期の短かつたに對し何の不平を持たない。清長が僅か五年間に富士山頂の絶對的版畫藝術を完成して、その影響を永劫ならしめたことを思ふと、私共はただ彼こそ選ばれたる浮世繪師であつたと歎美せざるを得ない。實に彼は天の命に依つて日本の浮世繪版畫の藝術界に顯はれたのである。

今清長の畫蹟を調べるに、私の見てゐる最も製作期の早い、假令彼の處女作でないにしてもそれに近い所の圖に那須の與市を描いた黃紅二色の稚拙極まるものがある。恐らくそれは彼の二十一二歳の作であらうが、彼が安永五年頃までに作つた細判紅繪の芝居繪は幾種類も今日現存してゐる。そして彼は安永六年に入つて細判錦繪を作り始めてゐるが、私は第一に安永六年春狂言森田座に於ける『江戸縫(したて)小袖曾我』出演の山下金作役あこやに注意したい。如何となればその圖に清長の情調が粗雜な配色と筆觸との間に現はれ、どこか風俗繪じみた點があつて將來彼が美人畫の時世藝術へ赴く人であることを仄めかしてゐるからである。然し彼の俳優を取扱つた傑作版畫は『山下金作と二美人』であらう。これは時の名俳優を中央に立たせ左右に二美人を配したもので、私は本圖を評してかういつてゐる。『眺むれば玲瓏たる秋の滿月を望むかの感がある。何等一點の瑕瑾もない珠玉の如き作品である。その柔軟溫和な光澤は內部から光つて人をしてただ甘味な抱擁を受けるの印象に醉はしめる。正にこれ筆者が完全に自己の藝術を支配し、窃かにその勝利を樂しんでゐるの作品である。』清長は天明中期に『中村里好と市川高麗藏』或は『團十郎八百藏宗十郎』或は『市川門之助岩井半四郎』の如き所謂出語り物を數多く作つてゐるが、若し彼をこれ等の役者繪と『風俗十二通意』や『四季八景』や『箱根七湯名所』や『淺草金龍山十境』の如き中判錦繪にのみ限つたならば、彼は決して偉大な畫師でない。清長は湖龍齋の後を受けて天明二年末頃から『雛形若菜の初模樣』を出し始めてゐるが、この揃物とても清長のその後二三年より突如として發揮し始めたその本領をまだまだ出してはゐない。湖龍齋の『雛形若菜の初模樣』は概していふと、強烈な紅と黃を亂用した配色にかかつたもので精緻な藝術美に乏しい。それに反して清長は湖龍齋の淫蕩氣分を緩和して畫面の情調を落付かしてゐても、斷じて清長の誇り得るものとは云へない。この時代に至るまで清長は修養時代即ち徒弟時代であると云へばそれまでであるが、要するに彼は天明三年に至るまでは必ずしも凡庸ではなかつたが左程偉大な畫家であるとは思はれなかつた。

傳へ聞く『君子は豹變す』といふ言ありと……これまで左樣偉大な畫家ではなかつた清長が天明四年に一大天才として浮世繪版畫界に突如君臨するに至つた、ああ、この位天下の驚歎に價することは

四條河原夕涼體

なかつた、實に霹靂一聲の感とは正にこのことであつたであらう。彼はこの時天の命に依つて選ばれた畫家として、東天の密雲を破つて出御する太陽の藝術家であつたのである。その結果からいふと彼は過去の版畫藝術を善用して自己の手法を作り以て箇性的姿を整へたのであるが、彼はどこからこの奇蹟を演ずるの神秘術を握るに至つたか。これに對する私の答は簡單である。曰く、彼は實際生活の美人に眼を開いてその澄澈たるライフに觸れたのである。ライフの泉は滾々として盡くる所を知らない。藝術はそれに觸れそれを自分のものとして始めて永劫性の得度を體現することが出來る。清長は兩眼をかつと開いて實際生活の美人の香氣に醉ひその皮膚に觸れた時、彼は外面的藝術を離れて内部の遙かなるものに到達するの秘密を握り得たのである。そして彼はその藝術的表現に動かすことの出來ない基礎石を据えたのである。米國の詩人フキッケは左の詩を作つて清長の美人を禮讃してゐる。

『何といふ神樣達だ、惠み深い生活から地上に再生なされて、
前よりもつと清い姿で私共の庭をお滿たせになる。
何といふ古い昔の高貴な人種が、
今この地上を再び訪れになつたことであらう。
それ等の人々は氣高い注視を集めて、

四條河原夕涼躰

第八十四圖